



矢島 渚男 選

折りたたむ如くに暮るる秋の空

小金井市 高橋 広子

【評】春の日暮れはゆっくり、対照的に秋ははたりと暮れる。短い。それを「折りたたむ」ととらえた鋭い感性に脱帽する。

あの月を汚さぬやうに願ふのみ

熊谷市 間中 昭

【評】私は先々月のスーパームーンを十二時過ぎの数分雲間から現れ、金環に飾られた時に見た。偶然に恵まれた幸運と思う。なんと美しい天体であろうか。月を人間の欲望の対象にしてはならない。同感。

新涼や小さな指と積み将棋

東京都 中島 徒雁

【評】将棋を覚える前にまず積み将棋。駒を出来るだけ高く積み遊び。小さな指はお孫さんか。

鱒雲チャイムに牛の立ちあがる

泉佐野市 高松 良子

鳥海山近寄りて見ゆ秋近し

酒田市 石塚 禎子

砂浴びの小さな雀み秋の雨

行橋市 野田 文子

鋸の突きで分割夏水

大阪市 塚本 宣雄

賢治忌の最高気温更新す

川崎市 多田 敬

長き夜や名残り永菓の置き処

宇都宮市 松広 訓

おにぎりは自分のために花野行く

東海市 斉藤 浩美

宇多喜代子 選

利根川を越せばふるさと秋の雲

太田市 阪本 和夫

【評】関東平野を流れる利根川。この大河の向こうに故里がある。秋の雲を眺めつつ、川の向こうの故里のことを思う。望郷の念の強い句。教室のみんな見ている秋の虹

総社市 風早 貞夫

【評】授業中だったのだろうか。またまた空に虹が見えた。みんな先生の方を見ないで虹を見ている。たぶん、先生も生徒と一緒に虹を見ていたのだろうか。

大げさに割箸わって敬老会

神奈川県 石原美枝子

【評】敬老会の集いでお食事が出た。まず割箸を割る。久々のことだったのだろう。手にした割箸を大きな仕種で元気に割る。

手を置きし墓石の温み秋彼岸

東京都 有本としを

孫の手の中に一粒椿の美

筑紫野市 二宮 正博

夕暮の杖の重さや秋遍路

姫路市 戎子 千賀

よちよちの子に絡まりし秋の蝶

大阪府 西尾 千カ

群青の空に一片秋の雲

調布市 野口 澄栄

さりげなく膝に歳時記敬老日

東京都 齋木百合子

半分は空半分は大稲田

千葉市 宇野嘉世子

正木ゆう子 選

賢治忌や妹のなきわがひとよ

東京都 野上 卓

【評】宮沢賢治には四人の弟妹がいて、中でも二歳下のトシは二十四歳で夭折し、兄の創作に大きな影響を与えた。きょうだいもまた人生の賜である。賢治忌は九月二十一日。キャンプ場無人や蛇口まはしてみる

熊谷市 田島 良生

【評】時季外れなのか。誰もいないキャンプ場で、水が出るか確かめている。自分にもそんなことがあったような気がする不思議なりアリティ。二度揺すり守宮窺い雨戸引く

松戸市 稲葉 豊美

【評】小さい守宮だと、知らないうちに雨戸で傷付けることがある。雨戸を動かしますよ、どいてくださいよと守宮に知らせる優しい作者。黒鯛の魚拓に夏を惜しみけり

大東市 堀 志泉

無花果に触れて指より老いてゆく

千葉市 椿 良松

ドアストッパーに役立つことも土手か

長野市 池田 典隆

ぼちゃ

今更に乙女心や花茗荷

川崎市 松浦 恵子

月見して男にできぬ流れ膝

京田辺市 加藤 草児

右手に網左手指にトンボ挟み

交野市 遠藤 昭

眼裏にまた鷹柱枕かな

津市 中山 道春

小澤 實 選

着ぐるみの頭外せばいわし雲

東京都 安藤ゆき子

【評】イベントなどで着ぐるみを着てもりあげている。頭の部分は暑苦しいし重くて、息も苦しうだ。それを外した際の爽快感を、季語いわし雲で、たくみに表現している。煮玉子をはんぶんこせる良夜かな

松原市 たりりずむ

【評】名月の夜、酒の肴の最後に残った煮玉子一つを友と二人で分け合い楽しむ。玉子の断面が満月に似ているがさまで嫌味には感じない。秋暑し湯切りの音のチャツチャツチャ

村上市 鈴木 正芳

【評】秋暑のラーメン屋を訪れ、店主が行う麺の湯切りの音をしかと聞き取った。作者はそこに一種爽快感を感じているように見受けられる。のし棒に預ける体走り蕎麦

東京都 森 一平

電線をつつ走る猿柿くはへ

川口市 高橋まさお

居眠りの隣起こさず夜学の子

高山市 直井 照男

海へ出て行き先はるか秋の蝶

日立市 菊池三三夫

栗飯の栗にひつつくはんかな

伊勢市 藤田ゆきまち

地下水を汲み上ぐる塔秋の風

横浜市 小林 敏和

父の忌に母手を合はず原爆忌

さいたま市 坂崎 守寿